

2024年10月6日 世界聖餐日(聖霊降臨節 第21主日)礼拝メッセージ

「キリストを生きる」

水谷憲牧師

聖書 フィリピの信徒への手紙 1章 12-30節

神様のつくられた初めの人間はアダムとエバだとされていますが、その彼らがエデンの園において、神様から食べることを禁じられていた木の実を、蛇にそそのかされた拳句に食べてしまい、エデンの園を追い出されてしまったという出来事が創世記に伝えられています。そして私たち人間が、太古の昔より様々な罪の虜となり続けているのは、私たちがエデンの園を追われたアダムとエバの子孫であるからだ、というわけです。ローマ・カトリックでは、道徳的な観点から見て特に重大な結果をもたらす7つの罪あるいは過失、すなわち「傲慢・貪欲・情欲・嫉妬・貪食・憤怒・怠惰」を「7つの悪徳」として定めているわけですが、現在の私たちの社会においても、毎日新聞を開いてもテレビをつけても、その7つの悪徳に基づくような犯罪が行われた知らせのない日はない。闇バイト、あおり運転、隣人トラブル。今では、親が子を殺し、子が親を殺すような事件を見ても「またか」と感じてしまう始末で、他人を殺害する事件などは当たり前すぎて、よほど衝撃的な事件でもない限り何事もなく読み飛ばし、あるいは聞き流してしまうような日常になってしまっている。しかし、我々人間はそのようなアダムとエバの末裔でありながらも、誰かの命を生かすためにその身を犠牲にした人だって、昔も今もわずかながらもおるわけです。

例えば、第二次世界大戦中のヨーロッパ、有名なアウシュヴィッツ強制収容所という、ユダヤ人をはじめとするいわゆる「下等民族」を絶滅させるための収容所において、死刑を言い渡されたある一人のポーランド人の命を救うために、自らの命を身代わりに差し出したコルベ神父という人がおりました。20世紀中盤のアメリカにおいて、アフリカ系アメリカ人、いわゆる黒人の当たり前の尊厳の回復と権利の獲得とを夢見て、迫害や死の恐怖にさらされながらも民衆の先頭に立ち続け、その末に暗殺された、マルチン・ルーサー・キング Jr. という牧師がおりました。私たちにとってもっと日常のもっと身近な場面だって、おぼれる妹を助けようとして川に飛び込んで命を落とした幼い姉があり、駅のホームから転落した男性を助け

ようと自らホーム下へとっさに飛び降りたために命を落とした青年がありました。猛吹雪の中で遭難し、娘に自分の上着をかけて子守唄を歌いながら娘の命を守って死んでいった父親がありました。生徒の命を守るために学校に侵入した暴漢と戦って殉職した教師がありました。かつての東日本大震災においても、逃げる人々を誘導していて波にさらわれていった消防団員や、津波に飲まれる最後の瞬間まで防災無線で避難を呼びかけていた職員の方がいました。能登半島地震、救助に向かおうとしている中で亡くなった消防団員の方がいました。この夏の一連の豪雨災害においても、身の危険を顧みず職務を全うしようとして殉職された警察官の方もいました。自分の身を犠牲にしようとは考えていなかったにせよ、誰かの命のために自分のことを忘れてとっさに身を投げ出した人々が、アダムとエバの末裔であるしょーもない私たちの中にも、確かにあったわけです。

しかし、さすがにそのような出来事を私たちは普段それほど頻繁に耳にすることはありません。だからこそ、いざそんな出来事を知った時私たちは、その人々の生き様・死に様に強く心を揺さ振られるのですが、それでも私たちにとって直接関係のないことであると、いつしかその崇高な行為も記憶から薄れていってしまうものです。しかしもしもそれが、たまたま自分のすぐ身近で起こったことであれば、どうでしょうか。誰かのために自分の身を犠牲にするという崇高な行為をなした人物が、自分の親、兄弟、子ども、あるいは友人、幼なじみ、職場の同僚、学校の先生、いつも親しく挨拶をしていた近所のおばちゃんだったらどうでしょうか。その生き様・死に様は、新聞の三面記事どころか、きっと世間が忘れ去ったとしても自分の心だけには深く、いつまでも残って行くのではないのでしょうか。「確かにあなたの行為は崇高なものだった。誰にも恥じることはない。でも、それと引き換えにあなたは自分の人生を、自分の命を棒に振ってしまったではないか。ばかだなあ。でもね、このことによって、あなたの人生・あなたの命には大きな意味があったのだということが私にはよく分かった。できることならこの私もあなたのように生き、あなたのように死ねたら…」私だったらそう感じるような気がするのです。そしてそう考えるとき、同時に私は、イエス・キリストの生き様・死に様にクリスチャンである私はどれほど影響を受けているのだろうか、とも考えさせられるのです。

イエスが十字架に付けられて死んだのは、私たち人間を罪の滅びから救い上げるためだった、とされています。それはつまり、この私、7つの罪に代表される小さな罪をいつも積み重ねながら生きているこのしょもない私の代わりに、イエスが自分の命を投げ出して神に対して罪滅ぼしをしてくださった、ということです。何の関係もないこの私の命を、罪による破滅、いわゆる地獄行きから助けるために、イエス・キリストは命を投げ出して犠牲になって下さった、ということです。だからと言ってキリストは、それを恩着せがましく私たちにアピールしたりはされない。しかし私たちはその、私たちの全く気付かないところで実は私たちのために命を投げ出して下さっていたというキリストの生き様や死に様を、もう少し知っていてもいいのかもしれない。

聖書の御言葉は私たちに、「お前は赤ん坊の頃に高熱を出して死にそうになったことがあってなあ、その時お前のお母さんは夜も寝ないで看病してくれていたんだよ」とか「お前のお父さんがいないのはなあ、お前が小さい頃に車にはねられそうになって、その時に身を投げ出して助けてくれたからなんだよ」などという、私たちがある日突然気付かされる、今まで知らなかった真実を知らせてくれる手紙あるいは語りのようなものだとは私は理解しています。しかし、真実であっても読まれなければ知られないままに終わってしまいますから、初めて聖書を読みます、といった方々は、新聞の社会欄を眺めるようなつもりでいい。「へー、こんな出来事あったんだ」で十分。イエスの十字架の事件を読んで「ふーん、ひどい話やなあ、でもこの人えらいわあ」とか「こんなええ人が、気の毒なことやなあ」とか思うくらいで結構。でもその「三面記事」がいつか、「キリストがこうやって惨めに死んでいったのはなあ、実はアンタのためだったんだよ。キリストはアンタの命を助けるために、アンタを死なせないために、あえて十字架についたんだよ。でもキリストは文句一つ言わなかったのさ。アンタのためだったからだよ」というメッセージとなって自分自身に語りかけてくる時が必ずくることを、私は信じています。

21節においてパウロは「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」と言っています。「生きるとはキリストである」とはどういうことか。これだけでは意味が分からない。今日の箇所の小見出しを見ると「私にとって、生きる

とは「キリストを生きる」と書かれてあります。では「キリストを生きる」とはどのようなことか。これでもまだ意味がよく分かりませんね。これは「キリストのように生きる」ということであると、一つは理解できますが、もう一つそれに加えて「キリストと共に生きる」ということでもある、と私は理解しています。私たちと親しかった人・愛する人・自分によい影響を残した人が、いつまでも自分の心のうちに生きていて、いつまでも自分と共にあるように、キリストと共に生きるということです。いつでもキリストと共にあって、こんな時キリストならどうされたか、キリストならどう言われたか、キリストはどう思われるか、と常にキリストと一緒に人生を歩んでいくということです。

もちろんその過程においては、キリストと共にあるが故にしんどい思いをすることもあるでしょう。キリストは愛と優しさを貫いたために苦しめられ痛めつけられ、十字架につけられた人でしたから、私たちが本当にキリストと共に生きようとするとき、同じような思いをするときもあるかもしれません。しかしそれも、私たちの知らないところで私たちのために命を投げ出す、そんなことまでして、こんな私を永遠の滅びから救い上げてくださったキリストへの恩返しであることを思って、「キリストを生きる」にあたって立ち足はだかってくるであろう試練のひとつひとつを乗り越えていけたらと思います。そしてその「キリストを生きる」私の姿から、新たに「キリストを生きる」者の連鎖が生まれ広がってゆくその時、キリストの犠牲も、誰かの命のために身を投げ出したあらゆる人々の命も、本当に報われるのだと信じます。

窮屈で息苦しい世の中になってきていますが、神様はアダムとエバの末裔であるこんなしょーもない私たちをも決して見捨てることなく、私たちを表から裏から支え良い方向へ導き、何らかの形でこの世のために豊かに用い、その労苦に必ず報いて下さるのだということを、私たちは「キリストを生き」ながら共に信じていきたいと思えます。